

幼稚園入園当初の3歳児の様子と親の反応との関連 — 親が記述した日誌からの検討 —

藤崎 春代

Parents' diaries on the relationship between 3-year-old children's attitudes and parents' reactions at the start of kindergarten

Haruyo FUJISAKI

The relationship between 3-year-old children's attitudes and their parents' reactions at the start of kindergarten life were investigated, through an analysis of diaries written by 79 parents. Three types of children's attitudes were identified; 'smiles' (children smiled in the morning and when returning from kindergarten), 'tears and smiles' (children cried in the morning, but smiled when returning from kindergarten) and 'anxiety' (children neither cried in the morning, nor smiled when returning from kindergarten). Of the children, 65.8% had smiles, 21.5% tears and smiles and 7.6% anxiety. These differences were examined from the perspective of children's knowledge and experience about kindergarten life. Results indicated that parents responded to their children's attitudes, by guessing the meanings of the children's attitudes. As a result, they felt either easy or uneasy. It was concluded that parents were involved in kindergarten life through their children's attitudes and that some parents experienced separation anxiety.

Key words : kindergarten (幼稚園), 3-year-old child (3歳児), parent (親),
separation anxiety (分離不安), transition (移行)

1. 問題と目的

4月に新年度が始まると、保育所や幼稚園には笑顔で登園する子どもの姿とともに、泣きながら登園する子どもの姿も少なからずみられる。入園とは、慣れ親しんだ生活の場である家庭以外の場に参入することであり、必ずしもスムーズに参入が行われるわけではない。入園に際しての子どもの戸惑いの様子は、従来、安全基地である親から引き離されることに不安を抱くという、分離不安の視点から論じられることが多かった（人見, 1988；柴田, 1985, 1986）。分離不安の強さは、子どもの年齢とともに変化し、誕生間もない時期には分離不安の様子がみられず、愛着関係が形成される0歳代後半以降1歳代をピークとして続く（Bower, 1977）。保育所において、産休明けから

の入園児よりも産休明けからの入園児のほうが大泣きをしながら登園してくる様子などは、こうした分離不安の強さの変化に対応するものと思われる。一方、3歳児クラスに入園する場合にも、分離不安という視点のみで検討することが妥当かどうかは検討を要する。人見知りや分離不安をコミュニケーションの不成立という視点からとらえ、ことばで自由にやりとりできるようになる4・5歳になると急速に分離不安が減少するとの指摘もある（内田, 1989）。また、大学生の書いた自分史の内容分析を行った研究では、園生活を楽しめなかった理由として、親からの分離の他、子どもの性格特性、家庭（親）と園（保育者）との相違を見出している（藤崎, 1991）。そこで本研究では、子どもの3歳児クラス入園についての戸惑いを検討するにあたり、入園を「人生におい

て最初の移行」と位置付け(山本・Wapner, 1992)、親からの分離以外の要因として、家庭と園との相違という視点に注目して、子どもの入園時の様子の違いを園生活についての事前知識や事前経験の有無と絡めて検討することを第一の目的とする。

移行を促進する事前知識や事前経験については、兄姉の在園経験、就園前保育経験、そして入園前の友達とのかかわり経験項目を含む入園理由からとらえる。兄姉の登園に付き添ったり、行事を参観したり、兄姉から園の様子を聞いたりすることは、弟妹に園についての事前知識を与えるとともに、入園への期待を高めるであろう。就園前保育経験については、入園当初の3歳児の状況を、3歳からの入園児と2歳児保育からの入園児とで比較した研究において、毎日泣いたり、行き渋ったりする「かなり抵抗がある」子どもは、2歳児保育経験児にはいなかった、と報告されている(浅見, 2009)。また、園の特徴の一つは、家庭とは異なり大勢の同年齢の子どもがいることであり、入園前に近所の子どもとのかかわり経験があることは、園生活への準備となるだろう。

一方、分離不安については、近年、母親の側に注目した検討がなされるようになってきた。乳児期の子どもの行動抑制傾向と母親の分離不安との関連が専業主婦群においてみられること(水野, 1998)、就園前の子どもとの分離を母親自身がどのように捉えるかについては、伝統的母親役割観・子どもの特徴・周囲のサポート・母親自身の要因等が絡み合っていること(角張, 2004)などが示唆されている。0歳から6歳児をもつ親を対象として、保育所に子どもを預けるという状況を母子分離状況として検討した柏木・蓮香(2000)は、子どもを預けることが母子双方にとって積極的意味を持つことととらえられていることを明らかにする一方で、罪悪感や懸念の強い母親がいることも示した。これらの研究は、分離を望まない、あるいは分離を不安に思う母親の存在を示唆するが、望むと望まざるとにかかわらず、子どもの入園は、母親に分離・子別れを促す(安藤, 1995; 根ヶ山, 1999, 2002; 塩崎・無藤, 2006)。そして、入園後の母親の変化については、入園後の7月に調査した今井(2009)が、母親にとって第1子入園は〈自身の成長のきっかけ〉や〈挑戦〉であり、その挑戦を乗り越えることによって

成長するととらえられること、第2子入園は〈子育てにおけるステップアップ〉や〈子離れ・親離れ〉というように子育てプロセスの一時点と位置付けられるようになることを、10月から11月に調査した今井(2008)では、母親に精神的余裕や仕事への関心が生まれてくることを、見出している。入園後3カ月あるいは半年が経過した頃には、親自身も落ち着いて自身の成長を感じるようである。しかしながら、自身の成長を感じられるまでの道のりは決してスムーズなものではないと思われる。親との分離からであれ、園生活についての事前知識や事前経験がないための理解不足からであれ、子どもの示す戸惑いの様子は、親のさまざまな反応を引き起こすであろう。そこで、本研究では、「入園とは、親にとっても子どもを家庭外の生活へと送り出す移行経験である」とする視点から、入園直後の親の反応を検討することを第二の目的とする。

さらに本研究では、第三の目的として、子どもの様子と親の反応との関連を検討する。幼稚園児の親の場合、専業主婦が多いと考えられ、専業主婦において乳児の行動抑制傾向と母親の分離不安傾向との関連を見出した水野(1998)の研究結果を参照するなら、泣いたり不安そうな様子を示したりする子どもの親は、自身も分離不安を示す可能性が考えられる。また、「3歳までは母の手で」という3歳児神話のもと、子どもと密着した日々を過ごしてきた親にとっては、子どもが順調に園生活に慣れていく場合にも、入園に伴う分離は容易ではない可能性があり、子どもの様子とは独立に、親が分離不安を感じる可能性もあろう。その際、該当児のきょうだい順は、親の園生活への移行経験の有無を示す指標と考えられ、先の今井(2008, 2009)の結果を参照するなら、該当児が第1子か第2子以降かにより、分離不安の感じ方が異なる可能性がある。

本研究では、上記の3つの目的に沿って検討するために、親に幼稚園入園直後の1週間の日誌記録を求め、親がとらえた園生活にかかわる子どもの様子とそれへの親の反応とを分析する。親が、園生活への子どもの移行状況について判断する際に子どもから得る情報は、表情や発話や行為であろう。そこで、本研究において子どもの様子は、表情・発話・行為を指す。なお、登園時は大

泣きしていても、園では笑顔で保育活動に参加するということはよくあることだが、親にとって、子どもが園生活に慣れてきているのか、楽しんでいるのかは、家庭での様子を通して判断されるものであろう。したがって、保育中の子どもの様子については原則として検討対象としない。ただし、親が園を訪問した折などに見かけた子どもの様子は、これを分析対象とする

Ⅱ. 方 法

1. 対象者

大学付属幼稚園^{註1)}3歳児クラスに200X年から200X+3年の4月に入園した子どもとその親。4年間の該当児177名のうち、後述の第1・2回質問紙調査、日誌記録調査の3種に親の協力の得られた79名(44.6%)の資料を分析対象とする。

2. 調査実施時期と配布・回収の手続き

第1回質問紙調査：入園直前の3月初旬の1日入園日(子どもに対して約2時間の慣らし保育を実施、親に対しては入園にあたっての最終説明会を実施)に著者が配布し、入園式当日に著者が回収。

第2回質問紙調査と日誌記録調査：入園式当日に著者が配布して、1週間後担任を通して回収。ただし、日誌記録調査については負担が大きいためが予想されたので、第2回質問紙調査とは独立した調査と位置づけ、「協力可能な方のみ、協力可能な日数のみ」の協力要請を行った。

3. 調査内容

本研究は、入園直前から卒園に至る3年余りの間に8回実施する質問紙調査と2回実施する日誌記録調査からなる縦断研究の、1回目と2回目の質問紙調査および1回目の日誌記録調査から得られた資料にもとづく。質問紙調査については、各回に多くの項目に回答いただいているが、今回は本研究の分析に用いた項目のみ取り上げる。

3-1. 第1回質問紙調査：家族数、祖父母と同居の有無、子育ての主な担い手、就園前保育利用の有無、(4歳児クラスからではなく)3歳児クラスからの入園とした理由。

3-2. 第2回質問紙調査：兄弟の在園経験の有無。

3-3. 日誌記録調査：記録用紙は1日分がA4用紙縦置き1枚からなり、左端には5時から24時までの時間目盛が縦方向に印刷されている。時間目盛に沿って、生活活動、「お子様のご様子やことば」、「ご家族の対応や感想」の3つの欄を設け、登園しない土・日曜も含めて1週間にわたり記述を求めた。教示は、以下の通りである。教示には、園生活にかかわることの記述を求めていることをわかりやすくするため、および、記述の仕方をそろえるために記入要領と例を挙げた。

『入園後の1週間ほどは、お子さまにとりましても、保護者の皆様にとりましても、期待と不安の入り混じる日々かと存じます。そうした日々を、どのように過ごされたのかをうかがうことができれば、お子さま方がどのように園生活に慣れていくのかをとらえる上で、貴重な資料となります。差し支えない範囲でご記入ください。』

記入要領：

- ①縦の時間軸に、起床・朝食・家を出る・帰宅・昼食・お稽古ごと・友達と外で遊ぶ・夕食・入浴・入眠などの生活活動をご記入ください。
- ②「お子様のご様子やことば」の欄には、どのような内容でも結構ですので、通園や園生活に関わるお子様のご様子やおことばをご記入ください。例：a. 自分からバスの時間を気にして、早く出かけようとお母様をせかした。b. バスに乗るときに、泣いてしまった。c. 人形を並べて、「**ちゃん」などと名前を呼んで、幼稚園ごっこをしていた。
- ③「ご家族の対応や感想」の欄には、ご家族が対応された内容や、お子様の様子についての感想などをお書きください。例：上記a. に対して―登園を嫌がるのではないかと思っていたので、ほっとした。上記b. に対して―できるだけ自分が先生とにこやかに話すことで、子どもを安心させようとした。3歳での入園は早かったかなと感じた。上記c. に対して―園に慣れてきたのだと思う。また、何人かのお友達の名前を覚えてきているのに驚いた。』

記録にあたっては欄が守られず、子どもの様子を記述したのに続けて、同じ枠に反応が記述され

ている場合もありうる。したがって、欄ごとの分析ではなく、欄を越えて、子どもの様子なのか、親の反応なのかにより分析を進めていく。

4. 倫理的配慮

第1回質問紙調査用紙配布時に、著者自身が口頭および文書で調査目的や縦断的研究計画の概要を伝えた。その際に、協力は任意であること、協力しない場合も園生活において何ら不利益を受けないこと、プライバシー保護の方針を説明した。配布と回収は担任を通して行ったが、調査用紙には封筒を添付して、回収時に封をして提出できるようにし、保育者が回答内容を見ることのないようにした。

また、毎回の調査用紙回収後1週間程度の後に、結果の概要を親および保育者に文書で報告して、対象者の利益保護に努めた。日誌記録調査については、親にとって入園時の子育て記録の意味合いもあると考え、希望者には、提出された記録調査用紙を複写して返却した。

Ⅲ. 結果と考察

家族数は3人から7人の範囲であり、祖父母と同居する家庭もあったが、子育ての担い手はすべて母親であり、回答者も母親であった。したがって、本研究において親とは母親のことを指す。すべての兄弟に在園経験があった。79名の子どものうち、兄弟がいるのは31名(39.2%)、就園前保育に通ったのは58名(73.4%)であった。就園前保育の利用回数は週5回が1名、週2回が5名であった他は、週に1回の利用であった。週2回以上の利用者が7.6%と少ないため、利用回数の違いに基づいた分析は行わない。兄弟の有無と就園前保育経験の有無との組み合わせにより4群に分けた結果は、兄弟がおりさらに就園前保育経験がある{兄弟+就園前}群が24名(30.4%)、兄弟のみいる{兄弟のみ}群が7名(8.9%)、就園前保育経験のみの{就園前のみ}群が34名(43.0%)、{どちらもない}群が14名(17.7%)であった。8割以上の子どもが、兄弟あるいは就園前保育から園生活についての事前知識を得たり、事前経験をしたりしている可能性がある。

1. 親がとらえた子どもの様子

日誌記録には、起床から就寝までのさまざまな時間帯において園生活にかかわる子どもの様子が記述されていた。全ての親により記述されており記述量も多かったのは、起床から登園までの時間帯(以下、登園時)と降園時の時間帯^{註2)}とであった。この他、家での遊び時、祖父母や友達との交流時、夕食時、入眠前などについての記述もあったが、それらは、全ての親により記述されているわけではなかった。そこで、全ての親により記述されている登園時と降園時の記述から、子どもの様子をタイプ分けすることとした。これらの時間帯は、園に送り出す時と園から帰った時とに該当するため、親が子どもの様子に敏感になっている時間帯と思われ、この時間帯の子どもの様子の記述に注目することは重要と考えられる。様子には、表情・発話・行為の3種類が含まれるが、タイプ分けにあたっては表情に注目することとした。これは、園での様子をたずねる親の質問に対して「楽しかった」と子どもが答えても、子どもが自ら園服への着替えをしていますが、親は不安そうな表情を重視して心配している例があったからである。自分の内的な状態をことばによって表現することが十分にできない幼児について、表情の情報を重視することは親がよく行っていることであろう。

表情に注目してタイプ分けした結果、〈にこにこ〉・〈涙とにこにこ〉・〈不安そう〉の3タイプが設定できた。〈にこにこ〉タイプは、登園時・降園時ともに、にこにこ顔が記述されるタイプであり、79名中52名(65.8%)が該当した。〈涙とにこにこ〉は、登園時は泣いている、それも大泣きをすることが記述される一方で、降園時にはにこにこ顔が記述されるタイプであり、17名(21.5%)いた。〈不安そう〉タイプは6名(7.6%)いた。このタイプは、〈涙とにこにこ〉とは異なり、登園時に大泣きするわけではないが、〈にこにこ〉とも異なり、登園を楽しみにしていることがうかがえるにこにこ顔が見られず、「不安そうな表情」と親によって記述されている。なお、記述からはタイプを判断できない者が4名(5.1%)いた。各タイプから約3分の1に当たる数をランダムに選び、さらに、タイプの判断ができなかった4名分を加えて、仮説を知らない者に3タイプへの分

類を求めたところ一致率は96.6%であった。不一致については、協議により解消可能であった。なお、以下の分析は、タイプの判断ができない4名のデータを除外した75名について行う。

事前知識や事前経験の有無と子どもの様子との関連を検討するため、兄弟の有無と就園前保育経験の有無の状況による4群別にタイプ該当人数をTable 1に整理した。Table 1からは、4群ともに3分の2程度の子どもは〈にこにこ〉タイプであることが分かる。〈どちらもない〉群においても〈にこにこ〉タイプが3分の2を占めるという結果からは、全体で3分の2の子どもが〈にこにこ〉タイプであるという結果が、兄弟がいる子どもの割合や就園前保育経験のある子どもの割合によるものではないことを示唆する。一方で、〈就園前のみ〉群と〈どちらもない〉群でのみ、〈不安そう〉タイプがいた。〈不安そう〉タイプの子どもの様子を日誌記録から詳細に検討すると、〈就園前のみ〉群の場合は、園での様子を「紙芝居見た」などと報告したり、「つうえんバックのつうって何のこと？」などと質問したりしている。それに対して〈どちらもない〉群の場合は園生活の報告はなされず、「どうしてお母さんは行かないの?」「どうして**（子の名前）だけ行くの?」と何回もたずねていた。〈不安そう〉タイプにおいては、〈就園前のみ〉群と〈どちらもない〉群とで不安そうな表情となる理由が異なるのかもしれない。前者は、園生活を報告したり、園生活について質問したりしており、不安でありながらも就園前保育経験による事前知識に照らして園生活を理解しようとしていると考えられる。それに対して、後者では園生活への言及はなく、家族と離れてひとりで通うことの不安を訴えることが中心となっており、分離不安の表現と考えられ

る。なお、後者のような質問は他のタイプでは見られず、〈不安そう〉タイプの〈どちらもない〉群でのみ記述されていた。

Table 2は、子どものタイプの違いを入園理由の違いから検討することを目的として整理した結果である。入園理由は、Table 2に示した選択枝および〈その他〉の自由記述欄からなっており、複数回答可とした。表の上部から、合計の選択者の多い順番に並べた。最も多い理由は「集団生活の意義を感じた」であり、半数以上が指摘している。背景には、3位の「近所に友達が少ない」という事情も絡んでいるのだろう。「近所に友達が少ない」は、〈涙とにこにこ〉と〈不安そう〉タイプでは6割前後があげるのに対して、〈にこにこ〉では3割程度である。入園前に同年齢の子どもと遊ぶ経験が少なかったことが、涙や不安そうな様子に関連している可能性が考えられる。一方、2位の「子どもが行きたがった」というのは〈にこにこ〉タイプに特徴的である。4位の「3歳が適切な入園年齢」という理由は〈にこにこ〉と〈涙とにこにこ〉の2タイプにおいて3分の1程度であった。今回は、適切と思った理由をたずねていないが、親が何らかの入園準備条件を考えていることが示唆される。子どもの入園により親の時間的余裕ができるが、そのことは5位「母の自由な時間がほしい」、6位「下の子とゆっくりする時間がほしい」、8位「仕事をしている・始める」という選択枝に該当する。最も割合の高い「母の自由な時間がほしい」は、どのタイプも3割程度の回答があった。なお、上述のように「3歳が適切な入園年齢」とする親がいる一方で、その他欄に「周りの子どもが3歳から入園する」や「3歳からでないと（4歳からでは定員がいっぱいで）入園できない」という消極的理由を記した親が5

Table 1 兄弟の有無と就園前保育経験の有無別のタイプ該当子ども数 : () 内%

	にこにこ	涙とにこにこ	不安そう	計
兄弟+就園前	16(72.7)	6(27.3)	0(0.0)	22(100)
兄弟のみ	5(71.4)	2(28.6)	0(0.0)	7(100)
就園前のみ	22(68.8)	6(18.8)	4(12.5)	32(100)
どちらもない	9(64.3)	3(21.4)	2(14.3)	14(100)
計	52(69.3)	17(22.7)	6(8.0)	75(100)

Table 2 入園理由別のタイプ該当子ども数：複数回答

() 内は各タイプの子どもの実人数に対する比率：％
 《 》内は一人あたりの平均理由数

実人数	にこにこ 52 (100)	涙とにこにこ 17 (100)	不安そう 6 (100)	計 75 (100)
集団生活の意義を感じた	33 (63.5)	11 (64.7)	3 (50.0)	47 (62.7)
子どもが行きたがった	32 (61.5)	3 (17.6)	0 (0.0)	35 (46.7)
近所に友達が少ない	16 (30.8)	10 (58.8)	4 (66.7)	30 (40.0)
3歳が適切な入園年齢	19 (36.5)	6 (35.3)	1 (16.7)	26 (34.7)
母の自由な時間がほしい	15 (28.8)	5 (29.4)	2 (33.3)	22 (29.3)
下の子とゆっくりする時間がほしい	7 (13.5)	1 (5.9)	1 (16.7)	9 (12.0)
将来に向けて有利	3 (5.8)	1 (5.9)	1 (16.7)	5 (6.7)
仕事をしている・始める	5 (9.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	5 (6.7)
きょうだいと一緒に通わせたい	3 (5.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (4.0)
育児不安があった	1 (1.9)	1 (5.9)	1 (16.7)	3 (4.0)
その他	5 (9.6)	3 (17.6)	1 (16.7)	9 (12.0)
計	139 《2.7》	41 《2.4》	14 《2.3》	194 《2.6》

名 (6.7%) いた。なお、消極的理由が子どもの〈不安そう〉タイプと結びついているわけではなかった。消極的理由を挙げた親の中には、子どもが早生まれであることを付記している者が2名いた。3歳とはいえ月齢が低いことにより、入園準備が整っていないと考えているのだろう。

2. 親の反応

親の反応は、登園時と降園時に限定せず全ての記述について、句点を手掛かりとして1文を1単位として分析する。すべての親の反応を整理した結果、その内容は、推測、対応、感情の3種類に分けることができた。推測は、たとえば「(バス停までの道で大泣きする子どもの様子を見て、子どもが) 登園が不安なのだろうな。」と子どもの気持ちや思いを推測する反応である。推測は、1文に複数の推測が記述されている例はなかった。対応とは、子どもの様子を受けて、あるいは子どもの様子の前に、親がとった行動や発話である。たとえば「(バス停までの道で大泣きする子どもに対して)『お友達や先生と一緒に遊ぼうって、待ってるよ』と言う。」などである。1文に複数の対応(例：「早く着替えようね」と言ったあとは、放っておいた。)が記述される場合、および、親の子どもへの発話を「」付きで記述する際

に「」の中に複数の文が含まれる場合があったが、いずれも1つの様子への対応であったので1対応とした。感情は、「(バス停までの道で大泣きする子どもの様子を見て、親自身が) 胸が締め付けられるようで泣きそうになった」というように、親自身の気持ちの記述である。感情も推測と同様、1文に複数の感情が記述されている例はなかった。

親の反応別に記述数の分布を検討した結果、いずれも分布に偏りがあったため、Table 3には記述数の平均値ではなく、中央値と最小値および最大値を示した。子どものタイプにより、反応記述数に差があるかどうかを検討するため、反応別に、全体の中央値以下の記述数の者を低群、中央値を超える記述数の者を高群として該当親人数をTable 4に整理した。反応別に、3タイプで低群・

Table 3 子どものタイプ別の親の反応記述数の中央値
 : () 内 最小値-最大値

	推測	対応	感情
にこにこ	3 (0-20)	2 (0-12)	2 (0-9)
涙とにこにこ	4 (0-14)	4 (1-17)	5 (0-17)
不安そう	5.5 (2-11)	8 (1-15)	2 (0-7)
全体	3 (0-17)	3 (0-20)	2 (0-17)

Table 4 子どものタイプ別の反応記述数の低群・高群別親の人数

() 内 親の実人数に占める比率%

	推測		対応*		感情		親の実人数
	低群	高群	低群	高群	低群	高群	
にこにこ	30(57.7)	22(42.3)	35(67.3)	17(32.7)	28(53.8)	24(46.2)	52(100)
涙とにこにこ	8(47.1)	9(52.9)	6(35.3)	11(64.7)	6(35.3)	11(64.7)	17(100)
不安そう	3(50.0)	3(50.0)	2(33.3)	4(66.7)	3(50.0)	3(50.0)	6(100)

* $p < .05$

Table 5 Table 4の対応についての調整された残差

	低群	高群
にこにこ	2.63**	-2.63**
涙とにこにこ	-2.09*	2.09*
不安そう	-1.24	1.24

* $p < .05$, ** $p < .01$

高群の該当者数について χ^2 検定を行った結果、推測は $\chi^2 = 0.64$, $df = 2$, $n.s.$ 、対応は $\chi^2 = 6.90$, $df = 2$, $p < .05$ 、感情は $\chi^2 = 1.77$, $df = 2$, $n.s.$ であった。対応でタイプ差が認められたので残差分析を行った結果 (Table 5)、〈にこにこ〉では低群が多く、〈涙とにこにこ〉では高群が多かつ

た。〈涙とにこにこ〉タイプでは、登園時に大泣きをするため、少しでもスムーズに登園できるように配慮した対応をしているのだろう。

ところで、子どもの様子から子どもの内面を推測し、その推測に応じた対応をすることは、入園時に限らず親が子育てにおいてよく行っていることであろう。それに対して、自身の感情面の記述は、親の側の入園および分離のとらえ方を検討するのに重要と思われる。そこで、Table 6に、どのような場面での子どもの様子に対してどのような感情面での反応を記述しているのかの記述例と総記述数を、Table 7に、タイプ別の記述数と実人数を示した。感情は、ポジティブな感情である「安心」とネガティブな感情である「心配」に2

Table 6 場面別の親の感情記述例

() 内 記述数

園の話	(97)	
安心	(77)	園の話をしてくれてうれしい。園で習った歌を歌ってくれてほっとした。
心配	(20)	園の話がなくてさみしい。先生と話せているのか不安。
登園	(80)	
安心	(58)	泣かずに登園できてほっとした。
心配	(22)	(子どもが) 登園時泣いて心配。 (子どもは泣かずにバスに乗るが) 母の方が心配で泣いてしまった。
降園	(16)	
安心	(11)	元気に帰ってきてほっとした
心配	(5)	帰り、むっとしていて不安。疲れた様子でかわいそう。
お弁当	(11)	
安心	(7)	お弁当を全部食べ、おいしいといってくれてうれしい。
心配	(4)	お弁当を残さず食べるか心配。
想像	(15)	
心配	(15)	泣いていないか心配。さみしい思いをしていないか心配。
園内	(7)	
安心	(3)	子どもの慣れた様子に順応性が高いと驚く。 園で会っても親にべったりしないので安心。
さみしさ	(4)	親がいなくても平気な様子にさみしい。
その他	(30)	

Table 7 子どものタイプ別・場面別の親の感情記述数（上段）と記述実人数（下段）

：（ ）内 タイプ別親の実人数に占める比率%

	園の話		登園		降園		お弁当		想像	園内	
	安心	心配	安心	心配	安心	心配	安心	心配	心配	安心	さみしさ
にこにこ	52 29(55.8)	6 5(9.6)	40 25(48.1)	6 5(9.6)	4 4(7.7)	2 2(3.8)	2 2(3.8)	4 4(7.7)	6 6(11.5)	3 3(5.8)	3 3(5.8)
涙とにこにこ	24 9(52.9)	9 5(29.4)	13 9(52.9)	13 4(23.5)	7 6(35.3)	2 1(5.9)	3 3(17.6)	0 0(0)	9 7(41.2)	0 0(0)	1 1(5.9)
不安そう	0 0(0)	5 2(33.3)	3 2(33.3)	3 1(16.7)	0 0(0)	0 0(0)	2 1(16.7)	0 0(0)	0 0(0)	0 0(0)	0 0(0)

分した。

【園の話】場面では、話の内容や話すときの表情についての感情の他、そもそも話してくれることや話してくれないことへの感情が記述されている。【お弁当】とは、お弁当のことを子どもと話す、あるいは子どもが持ち帰ったお弁当箱を見ての場面である。お弁当とは、子どもが家庭から園へと持ち込めるものであり、親は、子どもの喜ぶお弁当を作ることによって園での子どもを支えようとしているのかもしれない。【想像】とは、子どもが園で過ごしている時間帯に子どもの様子を思い描いている場面であり、実際の子どもの様子を目の前にしているわけではない。あるいは、実際の子どもの様子を反映しているのかどうか不明である。しかし、親は、実際に子どもの様子を見ていない場面でも、子どものことを考えていることがわかる場面であり、分析対象とした。この場面では、感情として「安心」はなく「心配」のみであり、「心配」であるがゆえに想像までするものと思われる。【園内】場面とは、保護者懇談会やその他の用事のために親が園に出かけたときに子どもの姿を見かけた場面である。この場面のみ、ネガティブな感情は「心配」というよりも「さみしさ」のほうが適切と考えられた。「さみしさ」としては、「親がいなくても平気な様子にさみしい」というように、子どもの様子が心配なものでないことにさみしさを感じている記述の他、客観的には「心配」を引き起こしそうな様子であるにもかかわらず、「母にしがみついてくるのも今だけだ」と思うとさみしい」というようにむしろしがみつきの喜びを感じているような記述があった。入園に伴う親の感情は、子どもの様子にのみ左右され

るものではなく、親の側の受けとめ方も大きく影響していることが示唆される。

Table 7からは、〈にこにこ〉タイプでは、【園の話】と【登園】場面の記述が多く、感情としては「安心」が多いことがわかる。しかし、【想像】して「心配」をしている親も1割程度いる。〈にこにこ〉タイプの親においても【想像】して「心配」していることは、子どもの様子とは関係なく心配している親が存在することを示している。〈涙とにこにこ〉では、【園の話】と【登園】場面に加えて【想像】や【降園】場面の記述が多かった。大泣きで登園したため、園での様子や帰りの様子が気になるのであろう。感情としては「安心」が多いものの、〈にこにこ〉タイプに比べると「心配」も多い。〈不安そう〉タイプでは、【園の話】場面について他のタイプと異なり、「安心」はなく「心配」のみ記述されていた。

次に、親の感情の揺れ動きが子どもの様子や該当児のきょうだい順に関連しているのかを検討するために、「安心」「心配」の両感情ともに記述するのか、一方のみを記述するのか、どちらも記述しないのかを、子どものタイプ別および兄弟の有無に注目して整理した（Table 8）。結果、〈にこにこ〉タイプで兄弟がいる場合には「安心」のみが多いものの、兄弟がいない場合には「安心」と「心配」の両感情を記述する者が多かった。子どもがにこにこしていても、兄弟がいない場合には心配する親がいることがわかる。〈涙とにこにこ〉タイプでは、兄弟の有無にかかわらず両感情を記述する者が半数おり、子どもの様子を見て一喜一憂していることがうかがわれる。〈不安そう〉タイプでは、子どもの不安そうな様子に多くの親が

Table 8 子どものタイプ別・兄弟の有無別の「安心」と「心配（さみしさを含む）」感情記述者数

() 内 比率%

	兄弟あり					兄弟なし				
	安心のみ	両方	心配のみ	両方なし	計	安心のみ	両方	心配のみ	両方なし	計
にこにこ	13 (61.9)	3 (14.3)	2 (9.5)	3 (14.3)	21 (100)	9 (29.0)	14 (45.2)	0 (0.0)	8 (25.8)	31 (100)
涙とにこにこ	1 (12.5)	4 (50.0)	0 (0.0)	3 (37.5)	8 (100)	4 (44.4)	5 (55.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	9 (100)
不安そう	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (100)	1 (16.7)	1 (16.7)	1 (16.7)	3 (50.0)	6 (100)
計	14 (48.3)	7 (24.1)	2 (6.9)	6 (20.7)	29 (100)	14 (30.4)	20 (43.5)	1 (2.2)	11 (23.9)	46 (100)

「心配」の記述をするであろうと考えたが、半数において感情記述がなかった。このタイプの子どもは、他の群に比べてにこにこ顔や大泣きといった感情表現が少ない。このタイプでは、兄弟がいないこともあり、親は、子どもの感情表現の少なさから、子どもが慣れてきているのか、楽しんでいるのかを詳細に捉えることが難しく、親自身の感情記述も少なくなるのかもしれない。ただし、今回〈不安そう〉タイプについては例数が少なく、今後更なる検討が必要である。

IV. 全体的考察

幼稚園3歳児クラス入園直後の1週間に、親が家庭でとらえた園生活にかかわる子どもの様子の記録からは、子どものタイプとして、登園時も降園時もにこにことしている〈にこにこ〉、登園時は大泣きするものの降園時はにこにことしている〈涙とにこにこ〉、大泣きしないもののにこにこ顔も見られず親が不安を読み取っている〈不安そう〉の3つが見出された。全体の3分の2が〈にこにこ〉タイプであるが、3分の1は朝大泣きしたり、不安そうな様子であったりすることが分かった。ただし、「どうしてお母さんは（園に）行かないの？」などの発話が〈不安そう〉タイプの一部にみられたのみであるという結果からは、大泣きしたり不安そうな様子を示したりする子どもがみな分離不安を示しているわけではないことが示唆された。兄弟がいる子どもには〈不安そう〉タイプがいなかったことや、〈不安そう〉タイプであっても就園前保育に通っていた子どもは園生活についての質問をしていることから、事前知識や事前経験のあることが子どもの園生活開始のスムーズさと関連していることが示唆され

た。ただし、〈どちらもなし〉群においても3分の2が〈にこにこ〉タイプであり、兄弟がおらず就園前保育経験がなくとも園生活をスムーズに開始できているという結果は、親のあげる入園理由「3歳が適切な入園年齢」に対応するとも考えられ、入園前の近所の子どもとの関わり経験など、子どもの側の何らかの準備状態も関連していると思われた。なお今回、兄弟と就園前保育経験については有無のみに注目しており、それらが具体的にどのような事前知識や事前経験を提供して、子どもの園生活移行を促進するののかについて検討できていない。この検討は、方法論的に難しい問題を抱えており、今後の課題である。

上記のような子どもの様子に対する親の反応を検討した結果、子どもの表情や発話や行為の意味を推測したり、対応したりといった反応のほか、親自身の感情が動いていることが明らかとなった。親の反応が、子どもの様子と関連するものであるのかどうかを検討した結果、推測記述数や感情記述数について子どものタイプによる差は見られなかったが、対応において〈にこにこ〉タイプの子どもの親は記述数が少ないのに対して、〈涙とにこにこ〉タイプの子どもの親は記述数が多いという結果となった。さらに、総記述数では子どものタイプとの関連が見られなかった感情について、その記述される場面や「安心」感情か「心配（あるいは、さみしさ）」感情かに注目した分析からは、〈涙とにこにこ〉タイプでは「安心」と「心配」の両方の感情を記述している親の比率が高い傾向がみられた。このタイプでは、登園時に大泣きをする子どもに登園を促すために対応が多く、登園時と降園時とで親の感情も「心配」と「安心」との間で揺れ動き、子どもの様子に一喜一憂しているものと思われる。一方、〈不安そう〉

タイプの子どもの親においては、半数に感情の記述がなかった。にこにこ顔や大泣きといった感情表出の少ない子どもの様子からは、不安そうであると推測するものの、詳細にはその内面を推測できず、親自身の感情記述を少なくしているのかもしれない。こうした結果からは、子どもの様子と親の反応とが関連していることが示唆された。

しかし、親の反応は、きょうだい順（つまり、親側の園生活移行経験の有無）にも影響されるようであり、〈にこにこ〉タイプにおいて、兄姉がいる場合には「安心」のみを記述する者が多いのに対して、兄姉がいない場合は「安心」とともに「心配」も記述する者が多かった。また、園内で子どもの楽しそうな様子を見る際に、「安心」ではなく「さみしさ」を感じる親もいるなど、子どもの様子とは独立に親側が分離不安を抱くことも示唆された。こうした結果からは、入園が子どもにとってのみでなく、親にとっても子どもを家庭外の生活へと送り出す移行経験であることが示唆された。

集団生活の意義を認め、入園にふさわしい時期として3歳を選び、就園前保育にも通わせるなどの配慮をしてきた親であるが、実際に入園式を迎えた直後は、子どもが表情や発話や行為を通して家庭に持ち込む園生活に親自身が巻き込まれていく。入園とは、子どもにとってのみではなく、親にとっても移行経験と位置づけることができよう。子どものタイプと親の反応が一定程度関連しているという結果からは、子どもが園生活を楽しめるようになることが、親の安心につながることを示唆する。保育者が、保育の取組みを通して子どもの園生活への適応を促すことが、入園時の親支援につながると考えられる。一方で、子どもが楽しんでいる様子を見せているにもかかわらず、心配したりさみしさを感じたりする親がいることも明らかとなり、親自身に焦点化した支援の取組みの必要性が示唆された。今後は、揺れ動く親自身が、子どもをどのように支えつつ、同時にどのように自身の心配やさみしさを乗り越えて、親子共に園生活に慣れていくのかを検討することが必要であり、こうした検討は入園時の親への支援として何が有効かを考える手掛かりを与えるであろう。

注

- 1) 該当園は特別な保育方針を掲げ、それに応じて特定の環境や教育方針を持った家庭の子どもが集まっているわけではない。園選択の主な理由は、家から近い、あるいは通園バスがあるなどの利便性や、小規模園であること（各年齢2クラス）などであり、大学付属園であることを理由としてあげる者は今回の対象者において13.9%と少ない。
- 2) 徒歩通園する子どもは数名であり、ほとんどの子どもが通園バスを利用する。したがって、登園時とはバスに乗るまでを指し、降園時とはバスから降りてくる時点からを指すことが多い。

文 献

- 浅見 均 (2009). 家庭から幼稚園への接続に関する一研究—幼稚園に於ける2歳児保育から考える—, 日本保育学会第62回大会発表論文集, 334.
- 安藤明人 (1995). 子別れと集団, 根ヶ山光一・鈴木晶夫 (編著) 子別れの心理学 福村出版, 165-179.
- Bower, T.G.R (1977). *A primer of infant development*. San Francisco: W.H. Freeman and Company.
- 藤崎春代 (1991). 子どもにとって園生活とは何か? : 大学生の自分史の分析より, 帝京大学文学部紀要 (心理学), 1, 35-60.
- 人見一彦 (1988). 女性の成長と心の悩み: 女子大生の自分史を通して, 創元社.
- 今井麻美 (2008). 幼稚園児を持つ母親の子どもと分離することの意味, 日本発達心理学会第19回大会発表論文集, 610.
- 今井麻美 (2009). 子どもの幼稚園入園に対する母親の意味づけ—入園児が第一子の母親と第二子の母親の違いに着目して—, 日本発達心理学会第20回大会発表論文集, 455.
- 角張慶子 (2004). 乳幼児を持つ母親の「分離不安」, 家庭教育研究所紀要, 26, 84-94.
- 柏木恵子・蓮香 園 (2000). 母子分離 (保育園に子どもを預ける) についての母親の感情・

- 認知一分離経験および職業の有無との関連で
一、家族心理学研究, 14, 61-74.
- 水野里恵 (1998). 乳児期の子どもの気質・母親
の分離不安と後の育児ストレスとの関連：第
一子を対象にした乳幼児期の縦断研究. 発達
心理学研究, 9, 56-65.
- 根ヶ山光一 (1999). 母親と子の結合と分離. 東
洋・柏木恵子 (編) 社会と家族の心理学.
ミネルヴァ書房, 23-45.
- 根ヶ山光一 (2002). 発達行動学の視座—〈個〉
の自立発達の人間科学的探究. 金子書房.
- 柴田幸一 (1985). 登園時における母子分離不安
に及ぼす諸要因について. 静岡大学教育学部
研究報告 人文・社会科学篇, 36, 185-193.
- 柴田幸一 (1986). 母子分離不安と3歳未満児保
育について 静岡大学教育学部研究報告 (人
文・社会科学篇), 37, 165-177.
- 塩崎尚美・無藤 隆 (2006). 幼児に対する母親
の分離意識：構成要素と影響要因 発達心理
学研究, 17, 39-49.
- 内田伸子 (1989). 幼児心理学への招待：子ども
の世界づくり. サイエンス社.
- 山本多喜司・Wapner, S. (編) (1992). 人生移行
の発達心理学. 北大路書房.

謝 辞

調査にご協力いただきました保護者の皆様にお
礼申し上げます。また、草稿に対して貴重なご意
見をいただきました東洋大学の久保ゆかり先生
に、記して感謝いたします。

本研究は科研費 (19530598) (研究代表者：藤
崎春代) の助成を受けたものである。

(ふじさき はるよ 昭和女子大学大学院生活機構研究科)

